

## 言語と生物の類似点に関する一考察 6

平見 勇雄

### A Study on the Similarity between language and creature 6

Isao Hiramami

#### Abstract

So far I have dealt with the exceptions of possessive genitives and tried to explain them in some previous papers. However, it seemed to be very difficult to do so from the viewpoint of cognitive linguistics and they are likely to be connected with the efficiency and effectiveness which are seen on both languages and creatures.

The aim of this paper is to elucidate why the evolution of languages seems to be related to the one of creatures.

**Key words** : creature languages evolution

**キーワード** : 生物 言語 進化

#### はじめに

2009年より紀要で言語と生物の類似点というテーマで5回にわたって論じた。それまで私が行ってきた言語研究は英語の所有構文に関するものであったが、なぜ所有構文の研究が生物と比較しながらの研究に至ったのか、その着想の根底になっているものは何であるのかをまとめてみたい。

#### 1 これまでの経緯

これまでの経緯を要約すると以下のような流れになる。所有構文 (A's B)、およびそれに対立する of genitives と言われる形式 (B of A) という二つの言語形式にはそれぞれの形式でしか表せない表現があった。A's B なら my friend, my book などで B of A なら some of them, both of you などの例である。また、いずれの形式でも表されるもの (the train's arrival VS the arrival of the train) もあり、なぜある表現は A's B で表現され、ある表現は B of A で表現され、あるいは

いずれの形式でも可能な表現があるのかを分析してきた。

認知言語学という言語学の一つの理論が形式と意味との関係を表裏一体のものと考え、ある表現がなぜ今取っている形に落ち着いているのかを明らかにするのが目的であることから、同じ形式に落ち着いているものの共通点を探ってきた。A's B は既に Taylor(1989b) でほぼ明らかとなっており、私は B of A というそれぞれの形式で表されるものの共通点を探ってきた。そして両方の形式で表される表現はいずれの形式も担う性質を持っていることを確認し、それぞれの形式と意味の関係を明らかにしてきた。

使っている母語話者自身は気付かないが、我々は無意識に、またごく自然に、背後にある言葉の特徴や傾向に沿って内容を表現している。そして背後にある法則や傾向と違和感を持つ時（たとえばネイティブではない人が発話するときなど）いわゆる言語の直感と言われるものが働き、おかしな表現であると感じ、初めてその存在に気付かされる。もちろん慣用的な表現の場合はおそらく記憶の力が違いに気付かせる大きな要因となっているだろう。しかし初めて聞く表現がおかしいと判断できるのは無意識にある法則に従って我々が言語を駆使し使っているからだと推測できる。

対立する A's B と B of A も、背後にあるそれぞれの形式の特徴が表現の選択を決定づけている。日本で育った人なら「は」と「が」を間違えることなく使い分けるが、なぜそうなのかは説明できないように、ネイティブは普通背後にある法則に気付いてはいない。だから Swan(2007)にあるような記述が著名な言語研究者にでさえ見られるのである。<sup>1)</sup> しかし認知言語学の基本を理解し、英語の持つ特性を知れば、このような記述にはおそらくは至らなかったはずである。ここに理論言語学の実践面での価値があり、英語教育にも大いに貢献できると考えられるのである。

英語という言語は日本語と比較すると正反対の傾向を持っている。その言語傾向は日本語であれ英語であ

れ、文の中の個々の形式やあり方に反映され全体に浸透する。これを証明している例が「**「する」と「なる」の言語学**」(池上: 1980)であった。この中では日本語と英語の持つ言語傾向が体系的に明らかにされている。

しかし言語が一つの傾向を示すとはいっても、個々のあり方を具体的に検討していくと、たとえば英語で言うところの形式においても共通性に合致しない、反するものが出る。いわゆる例外と呼ばれるものである。英語の所有構文の分野で功績を残している Taylor もその例にもれず、例外は除いて扱っている。

ただ、例外と一口にいっても、そのあり方はさまざま、中には説明のつくものもある。一つの例を挙げれば、英語には **end-weight** という特徴があり、言語全体に浸透している。それが個々の持つ特徴とバッティングし、全体の傾向が優先され、個々の特徴では反例となっている場合である。たとえば **Lucy's husband** は **the husband of Lucy** とはいえない。しかし A に当たる語が次の例のように長くなると容認される。

**the husband of the woman who sent me that strange letter.**

こういう例外は、理由がはっきりしていることから問題にはならないが、説明のつかない例がいくつも存在する。そのため認知言語学を専門としている研究者の中にはそういう例外をも説明できるような、さらに抽象的レベルの高い、包括的な共通性を探る方法を取る場合もある。

しかしながら言語に例外は付きもので、本来の姿である言語の姿を無視してまで、例外まで包み込むような共通項まで求めるとするのは正しい分析姿勢とは考えられない。しかも、あまりにも抽象性の高い共通項（スキーマと呼ばれる）は他の形式における共通項と差が出ない場合も起こり得る。そのような共通項は、いろいろなものに当てはまってしまう内容になりかねない。それでは直感的にもおかしい。したがって共通項を求めるなら、我々の直感に照らし合わせて、これ

なら具体性を持ち適切だと思われる程度のところで着地するのが妥当な判断ということになる。

ただ、それでは理論との兼ね合いから、説明のつかない例外を最終的にどのように扱い、説明するのかという問題を解決したことになる。より抽象的な共通項を求めることに異議を唱えるのであれば、これに代わる案、説明が必要である。同じ形式が使われているのに、なぜ共通性が感じられないものが同じ形式で表されているのかに理由があるのである。そこで例外がなぜその形式で表されるのかの理由を言語に広く見られる特性から考えると、以下に説明することが可能性としてあるのではないかという結論に至った。

それは言語というのは（この場合の言語とは特に英語を指す）、他の形式をとときには借りて、表現する性質が浸透しているのではないかということである。

言語はそもそもコミュニケーションのために発達したものである。コミュニケーションはどんな生物にとっても生存のため欠かせないものである。そのため同じ生物同士で意図が十分通じ合うことが保証されるよう発達しなければならない。人間は耳や目が不自由な場合、独自の方法を使ってコミュニケーションをはかろうと手段を編み出すことを見てもコミュニケーションがいかに重要かは容易に理解できる。普通に母国語を話す場合でも言葉というのは我々にとって都合のいいように発達するものである。その一つが複数の表現方法を生み出すことだろう。

生まれた幼児が泣くという、まだ言語とは呼べない段階から言葉は発達する。しかし泣くという行為であっても、それは何らかのメッセージを伝えられる。もちろん母親はなぜ泣くのか、理由が把握できない場合もあるが、泣き方によって、それがどの程度の訴えなのかある程度は予想できる。ごく普通の泣き方なのか、火がついたように泣くのか、意思の伝え方は限られているとはいえ、最初から段階的な面を持っている。この段階性は徐々に特定化に進み、さらに微妙な違いを言い表せる表現へと、コミュニケーションを高度にす

る複雑な方向に進んでいく。

その上に言葉だけでなく、表情や声の大きさ、声の荒さ、身ぶり手ぶりなどが付随して詳細を補おうとする。特に言葉は重要な差異である場合は細かく分けられる。分類する価値が生じるからである。たとえば魚を扱っている業者ならある魚の成長度合いは商品価値として区別に値するため、いくつもの呼び名がある。動詞でも、単に *surprize* に *very* がつく程度から *very* 以外の、より動詞の意味を際立たせるような副詞が当てられたり *amaze* や *astonish* のような言葉の違いとなって定着していくものもある。このように、段階性がバラエティに富んだものとして発達するのである。

同じものを指す場合でも違う呼び名が当てられる方向にも向かう。トイレにいくつもの婉曲的な表現が発達したり、父親を意味するときに「お父さん」「父上」「父」など、本人に呼びかける場合、手紙等を書く場合、他人に言う場合など、使い分けに複数の表現が存在するのもこの一つである。

さらにいくつかのものをまとめて表現する方法にまで広がる。父親と母親の二人を意味する両親という表現も段階的な発達である。二つの指示するものが一つの言葉で済むわけであるから、効率性が働いているのがわかる。さまざまな包摂関係の言葉はこれと同様である。

同時にもう一つの効率性も生じる。言い換えである。言い換えは、二つの相反する利点を持つ。一つは表現の同一性である。ある語に複数の言い方が生まれると、その一つに対してバックアップ的な、補佐的な役割を果たすようになる。辞書はこの側面を利用している。微妙な意味の違いや使い方の差は存在するが、その違いを無視して、何を指示しているかだけに焦点を当てて意味を伝えようとする。そこだけがクローズアップされるのである。

一方で、微妙な違いは上で述べた「父親」という単語の例のように使い分けにつながる。日本語は英語の *father* 以上に複数の表現が存在する。家庭内で使う普

段の言葉と、社会で使う場合の使い分け、文章と話し言葉の使い分けなど複数に分かれる。これはどの言語でも同じである。ただどの程度分かれているかは文化によって違う。表現方法が複数あると、同一性とは違う使い分けという別の側面の効果を生むのである。

したがって言葉というのは人間が生きていく上で必要な、社会的な側面、生物として生存する側面の両方から二つの大切な使命、すなわち「違い」と「同一性」の両面が反映されている。言い換えは語に限ったことではない。文なら強調構文などの表現にもつながっていく。

言い換えが代用の一つとしての機能を果たしていることは今述べたとおりであるが、ある概念体系を把握する点においても代用は大きな役割を果たしている。我々が物事を言語化する場合、具体的で目に見えるやり取りなら理解の上であまり問題は生じないが、高度な内容、あるいは抽象性の高いことを相手に伝えようとすると難しくなる。その場合、この問題を最も容易に解決してくれるのが、それを説明するのに有効だと思われる既存の概念を使って代用し、表現する方法である。つまり代用は効率のいい表現手段なのである。メタファーはその一つである。

メタファーは一般に比喻と訳されるが、ここでいう比喻は一般的に想像される文学的な意味で言っているのではない。Lakoff & Johnson (1980)で紹介された、抽象的な概念は具体的な例に見立てて、ある概念体系の一部を理解しようとする比喻のことである。一部といったのは、元となる概念体系と、その概念体系を借りて表現しようとする新しい概念体系のすべてが同じわけではないからである。似ているのは一部である。全く同じならば、それは同一の物ということになる。たとえば日本語でも英語でも時間という概念はお金に見立てて我々は理解している。普段意識しないが「時間がかかる」「時間を節約する」「時間を投資する」「時間を無駄に使った」「時間をあげる」という、時間に使われているいくつかの表現の例を見ると、英語でも日

本語でもお金に関して使われている表現であることがわかる。しかし「時間をへそくりする」という表現はない。時間の概念に当てはめることはできないからである。すべてが同じ概念体系ではないというのはそういう意味である。

また概念体系とっているのも一般的に言われている比喻と違い、一つのことだけの比喻に使われているわけではないからである。たとえば「あいつはキツネみたいな顔をしている」という文は、顔という面だけを取り上げた表現である。お金と時間に関する表現のように、複数の言い方が存在するわけではないから組織的に使われてはいない。この例を紹介しているLakoff & Johnson(1980)には、豊富にこれに似た例が紹介されているが、我々が物事を理解しようとする場合、他の概念の代用が行われていることがよく理解できる。

以上の例から、我々がコミュニケーションの内容を深めるためには代用という方法が浸透していることがわかる。代用というと、何か借りもの、というイメージを持ってしまふかもしれないが決してそうではない。言語活動を支える大きな基礎となっているのである。

ところで言語にはある一定の方向に傾いて発達する性格を持っていることがわかっている。先ほども述べた「[する]と[なる]の言語学」という池上(1980)で論じられている言語理論である。これは日本語と英語の特徴の違いを浮き彫りにしており、ある意味で日本人には英語の習得が難しい理由の一端を示していることとも関連づけられそうだ。<sup>2)</sup> どのような理論なのかごく簡潔に「する」と「なる」の言語学の関連の内容をまとめ補足したい。

英語は世の中での出来事を記号化(言語化)する際に「する」的、すなわち何かがある事態を引き起こすという捉え方をすることを好む傾向のあることが指摘されている。誤解のないように最初にお断りしておかなければならないが、英語の表現のすべてが「する」的にとらえられるということではない。あくまでその表現方



法を好む傾向があるということである。(したがって当然英語にも「なる」的な表現は存在する。)

一方の日本語は「なる」的に出来事を表現する傾向がある。英語のように何かはその事態を引き起こしたと表現することを好む言語ではなく、引き起こした行為者を明らかにしないよう、自然発生的に事態が起こったという表現を好むのである。したがって出来事を引き起こした個を埋没させて、全体の成り行きの中で事態が成立する言い方に傾く。「明日は会社が休みになります」「列車の時刻が変更になります」などの表現は誰かがそう決めた結果起こったことであるが、誰かが事態を引き起こしたことを避ける表現になっている。こういう表現は日本では日常茶飯事的に使われているが、日本語を勉強する外国人にとってはなかなかわかりにくい表現のようで戸惑う人もいるようだ。(我々日本人が英語を習得するのが難しいように、英語を母国語とする外国人が日本語を習得することは他言語(特にヨーロッパの言語)と比較すると難しいようである。)英語が何らかの行為を行う者(物)を表現することが前提となるのとは逆に、日本語は主語がなくても違和感がない文も多い。むしろないほうが普通だと思われる文も多数存在する。「まもなく京都に到着します」という新幹線内でのアナウンスもそうだろう。そしてアナウンスのあと「**We will be stopping at Kyoto**」というテロップが流れることを見た方もおられるであろうが、この二つの文を比較しても容易に両言語の違いが感じられる。

感情を表す表現の多くが他動詞として存在していることとも無関係ではない。**Fear**のような動詞もあるが**be pleased with, be interested in, be surprised at, be excited**を始めとする動詞がわざわざ受動態の形式で表されるのが学生時代不思議だった。そしてこれらの表現が他動詞のままの形で使われる例はあまり教科書には登場しなかったことから、わざわざ受動態の形に直して使うのなら、最初から他動詞の形である必要などないのに、と思ったものだ。しかし何かの原因を求

めて表現する傾向が英語にはあると知ってからはわかったような気になった。ある感情が湧きおこるには二つの可能性があり、その一つのあり方が他動的表現と一致しているからである。感情というのは自然と湧きあがってくる場合もあるが、外部からの影響が強く働いて感情が引き起こされる場合もあるからである。自分が勘違いして事実を知り、驚くという感情が生まれた場合より、突然曲がり角で誰かに待ち伏せされ、不意打ちを食らわされた場合は他動的に事態を表現したい気持ちになる。このような何かに引き起こされて感情が生じる捉え方は「する」的な言い方と合致する。そして何かによって引き起こされるという捉え方をする言語であることが理解できると、物主主語という日本語ではかなり擬人的に、時に気取った言い方に聞こえる表現が英語に存在している理由も自然なものとして受け止められる。**Why do you think so?**ではなく**What makes you think so?**という表現が学生時代はえらく仰々しい文だと思ったものだった。

日本語に比べ、形式と意味との結びつきを強固なものにしている英語が、このような、形式に依存的な言語になったかを推測する根拠の一つは、日本語にあるが、英語にはない「て、に、を、は」の存在だろう。もちろん英語にも日本語のそれに代わる格はある。しかし格の場合、語によっては意味を語順以外で示すことのできない性質を背負っているものもある。「ジョンはルーシーに英語を教えた」という日本語を英文にすると**John taught Lucy English.**となるが、「は」に当たるものは文章の最初に置く必要がある。また「に」に当たるものは動詞の後ろに置かなくてはならないし、「を」に当たるものは最後に置く。この順序が違えば意味が通じなかったり、別の意味になってしまう。英語が形式重視になった理由の一つは三人称単数のこういった性質、これに相当する類いのことが少なからず絡んでいるように思われる。

以上見てきたように、日本語と英語では正反対の方向に表現方法が発展している。しかもこの方向性への

変化はそれぞれの品詞の持つ特徴に影響を与えたり関連したりしている。たとえば英語で主語を明らかにすることは、あえて主語を表現しない日本語と比較すると、表現を出来る限り、詳細に表したい性質とつながってくる。たとえば名詞なら単数なのか複数なのかをはっきりさせることが英語では言語構造に組み込まれ義務づけられている。日本語のように「りんご」と表現するだけで済むわけではない。動詞であれば英語では行為の結果までもも含意する方向に意味が定着している。mix、persuade、call up など、それぞれ「混ぜて混ぜたこと」「説得して相手が同意したこと」「電話に相手が出たこと」までが英語では意味として入っている。

逆にこれらに対応する日本語は行為の結果がどちらなのかに関してはあいまいである。混ぜたけど混ぜられないこともあるし、説得したが駄目なこともある。また電話をかけたが相手が出ないこともあり、英語のように結果が確定することまでは含意しない。

以上のように名詞にしても動詞にしても、あるいは「今日は寒いみたい」「大根を二本ほど下さい」という表現に見られるようなぼかした表現を見ても、英語と比較すると意味をはっきり明示するわけではなく、まわりの状況を察しながら意味を読み取るよう習慣づけられているのである。

しかし相違点ばかりではない。英語、日本語ともに共通している部分はある。確かに英語の場合、意味、認識のあり方が日本語と比較すると形式に顕著に現れやすい性格を持っているが、日本語の場合、形式に現れないのかというと、そうとも言い切れない。我々は高校までに英語の文型を習い、第一文型から第五文型を教えられたが、日本語にそれに相当するものはないことから、日本語と英語は文のあり方からして違っているので日本語の文を形式と呼ぶことには躊躇がある。しかし日本語の場合も、語順ということからいえば、主語は最初にくるのが普通である。「私は彼女を愛している」という文と、「彼女を私は愛している」とい

う文なら、前者の方が普通である。また「オートバイ電車はねた」という文を聞くと、我々は常識からオートバイが電車をはねるわけではないから、電車がオートバイをはねたと解釈する。しかし一瞬オートバイが電車をと読む感覚を持つ人もいるのではないかと思う。それはとりもなおさず主語が最初に来るという語順に我々が慣れているからである。この点で英語のように文の形式という表現で日本語を呼んではいないが両言語は共通している。(もっともこれは世界中の言語の多くで共通したことである。)

しかし人間の認識が現れるのは言語の形式や語順に限らない。表面上には見えにくい、もっと深いところでの共通点もある。起点と到達点を意味する from と to の関係、日本語でそれに対応する「～から」「～へ」の関係である。内容をここで詳しく紹介することはしないが、人間の認識の点からこの現象を考察することはできる。認知言語学のアプローチから説明が可能なのである。したがって言語には表面的であろうとなかろうと、程度の差はあれ、外界をとらえる人間の認識が何らかの形で反映されていることは間違いない。

## 2 生物の場合はどうか

ところで生物が進化(必ずしも日本語で意味するような肯定的な意味だけとは限らない。たとえば馬の蹄が現在のような形になったのは一種の退化ともとらえられる)していくのは、まわりの環境との関係からだと考えられる。環境の変化がほとんどないと考えられる深海の生き物が、数億年前とほとんどその姿、形を変えていない事実からも環境との接触が変化に大きな影響力を持っていることは推測できる。もちろん進化には突然変異の問題も絡んでいるのであろうが、それはさておき、外界との関係が身体に及ぼす影響、外界との関係が言語に及ぼす影響には共通性があるように感じられる。生物は外界と接触したときにある刺激を体の感覚器官が受け取り、それに対応して長い期間を得て変化していくが、認知言語学の根底にある、我々

が世の中を感知して経験したことが言葉に長い期間を経て、反映されていくという点では共通しているからである。

平見(2009:p116)でも引用したが、鯨の祖先はもともと陸上に棲んでいたが、浅瀬のえさ獲得競争をきっかけに海に進出していったと考えられている。当然のことながら浅瀬のえさを求めていたのは鯨の祖先に限ったことではない。他の動物と餌をめぐる争いがあったと推測されている。しかしなぜ鯨の祖先だけが海に進出したのか。それは他の競争相手にはなかった特徴があったからだといわれている。鯨の祖先は耳のしくみが骨振動という水中に進出するのに向いている構造を持っていたからである。生物は生き残るために自らの生存をより有利にする方向に向かっていく。したがって、餌を求めやすい環境を手に入れられる条件はその動物の将来を決めていく大きな要因になる。

もちろん生物の意志でそのような変化がおこるわけではない。我々が自分たちの体を変化させたいと望んでも変わらないのと同様である。しかし生物には長い間、これまでとは違う別の環境に身を置くことで、身体全体が変化を引き起こしていくプログラムがある。

哺乳類が陸上から海に進出するこういった例はかなり極端な例であろうが、どんな生物にも変化する特徴は備わっている。また、現実的にも外界の変化に対応できる生物がこれまで生き残ってきたはずである。したがって変化に対応する能力は程度の差はあれどの生物にもある。ただ、外界の変化の対応といっても、気候や他の生物との生存競争、あるいは共生、天敵の有無など、さまざまな要因に適応できなければならない。一つのことだけに対応できればいいわけではなく、複数のことに対応できるよう全体が変化していかないとはいけない。だから変化のあり方も多様性を持つ。それだけの柔軟性が必要とされる。

全体の変化と身体各部分の変化は当然関連している。ある環境に入ればその環境下で対応するように変化するがその場合一つだけが変化するわけではない。

関連したいくつかのことが同時に変化する。人間が黒人、白人、黄色人種と分かれても、それは肌の色、髪の色など外見なことだけが変化したわけではない。むしろ外的な環境への対応によって内的な変化が体の中で起こったため肌や髪の色にそれが表れたと考えられる。たとえば外見上だけでなくその機能に変化をおこした一般的に知られている例はサングラスを白人がかけるのは、ファッションからというより黄色人種に比べて日光に対して目を守る必要があったからである。

一つの変化は必ずなにか他の変化と連動している。鳥も羽を持ったらすぐに飛べるようになるわけではない。飛べるようになるにはその生物の体を浮かせることができる程度にまで身体が軽くならなければならない、空から獲物を探せるようになるくらい目がよくなる必要があるなど、変化に応じて生き延びていける複数の条件が整っていかねばいけない。それが一斉になのか、段階的になのかはわからないが、変化は一部だけでなく全体に、そして一方向に向かうように仕組まれているのである。

もちろん言語が変化していくスピードと生物が身体の構造を変えていくスピードとは時の経過に違いはあるだろう。しかし我々の意志で変わらない言語傾向、言語が話者の意識を外れて一つの方向に向かう事実は、我々の身体に組み込まれている進化を司る何かが作用するあり方に類似しているのである。

一つの方向に向かっていく場合、すべてがその方向に合わせた変化となる生物のメカニズムが「する」と「なる」の例のように言語にも見られることから、生物に備わった特徴が言語にも反映しているのではないかと考えられるのである。もっといえば、生物を存在たらしめているメカニズムが言語のメカニズムにも関係しているのではないかと思えるのである。

また言語がこれだけ多様であるのは、いろいろな変化に対応できる力があり、柔軟性を持っていることと関連しているようにも考えられる。複数の言語現象を調べている訳ではないが、英語や日本語を見る限り、

一つの言語の中で一貫した傾向が見られることから、それぞれの言語の特徴に合った変化の仕方が行われていると考えられる。

環境に合わせて対応できる柔軟性は生存のための必須条件である。コミュニケーションの手段が生物にとって生きて行くために欠かせない道具であると考えれば、言語にもまた生存に必要なメカニズムが絡んでいても不思議ではない。

## まとめ

言語にはそれぞれの特性があり、その特性が他言語の特性といちじるしく異なる場合は、両者の間には大きなずれが存在し、両言語間で対応させるのが難しいことも起こる。単語でさえ対応すると考えられる語を入れ替えるだけで意味が変わってしまう場合もある。もちろん多くの単語（すなわち訳語）は対応関係がかなり近い場合が多いが、置き換えられる場合とそうではない場合（ナイーブという日本語と *naïve* は相当意味が違う）、使える範囲が違ったり（たとえば *expect* や *contribute* は日本語訳のようにいいニュアンスだけの場合に使われるわけではない）さまざまな違いがある。一見対応しているように見える語も、それぞれの言語体系の中であって初めて正確に意味が伝わり役割を発揮するのである。生物でいえば、同じ哺乳類だからといって、別々の動物の対応する臓器が同じように働かないのと同じで、あるべき環境に置かれてのみ本来の機能を果たすからである。全体の中で部分の役割が決まるのである。言語であれ生物であれ、すべては全体の中の関係からそれぞれの役割が生み出され、決定されるということである。変化というのも言語であれ、生物であれ、全体の中で連動して起こると考えるのが普通である。

生成文法は言語を話すことができる能力が生得的（*innate*）で、既に生まれたときから人間に備わっているものだとしている。これに対し、認知意味論は人間が生まれて習得する意味の多くは（たとえば上とか

下などの意味は）経験によるものであるという立場にある（ただし経験したことがすべて関係しているという意味ではないため経験主義とは言わずに経験基盤主義と呼ばれている）。そのためこの二つの理論は基本的に相容れない関係にある。

実際の言語の例を検討すると、人間が実際に経験しない限りは、出てこないと思われる表現形式が多々見受けられる。第三文型から第四文型に書き換えた際の間接目的語と動詞との間に生まれる直接的な影響の意味と実際に我々が経験するその事態における影響の差や、主語と目的語の語順などはその例であった。その点から考えると、確かに人間の認識が言語に関係していると言わざるを得ない。

しかし一方で経験基盤主義とは異なる生得的といわれる、生まれつき兼ね備わっている能力が存在することも否定できない。人間と同じように家の中で育てられ話しかけられても、犬が人間と同じように話すようにはならない。生成文法のアプローチは認知言語学と対立関係にあるが、いずれの主張も実際の言語をみると否定できない所がある。

言語が、環境との対応関係の中で生み出され、作り出されていることを考えれば、人間が外界を認識する部分とそれが生得的になっていく部分は連動しているように思われるのである。

生物が進化していく場合、すぐに変化が起こるわけではない。言語も外界との接触があるからといってすぐに生得的なものになったわけではないだろう。言語の生得的な部分も生物が進化、あるいは変化していく過程と同じように長い年月を必要としたはずである。生物がある変化に到達するためには、いくつかの段階があるように、言語も生得的な側面を獲得するにはいくつもの段階を経ていると推測される。

生物が変化を引き起こすには、最初は一つのことばかりかけとなるかもしれないが、その一つが決まるまでに環境との兼ね合いから、たくさんの判断が体内で取捨選択され、決定されていると考えられる。これは



人間が言語を習得していく過程でも似た側面がある。赤ちゃんは必ずしも間違っていない文ばかりを聞くわけではない。その中で取捨選択してある法則を身につけるのである。そして結果的に選ばれた一つの方向性の選択に呼応するように、変化にかかわる要因が反応して変化に至っているはずである。あるいは逆に、同時に複数の要因が関与する（この複数も、どのような複数になるかが全体の中で決められる）段階で一つの方向性が決まるというほうがいいのかもわからない。鯨の先祖でオオカミに似た体の動物が現在のような形に姿を変えた例を考えると、変化のきっかけとなる一つの長所に応じて変化していかなければならない複数の要素がある特定の長い期間をかけて体制を整え、それ

が一つの方向の変化を起こしたのではないかと思われる。

日本語のあいまい性もまた何らかの表現（おそらく複数の似たような性質の表現）をきっかけにその特徴が全体の中で選択され、一つの方向性を生み出し各個別に反応していったと考えられる。逆の方向に進んだ英語も同様である。生物の生存環境の方向性を決めるのと同じように複数の要素が一方向に動くメカニズムが言語形成においても働き、各言語とも方向性が自然と決まるのではないかと思われる。

こういった類似性が生物の観点から言語を考えるきっかけとなったのである。

## 注

- 1) Swan は次のように述べている。「不幸にして上の3つの領域 (A's B AB B of A) の構造の正確な違いは何かということは分析するのが複雑で難しく、これは英文法の中の最も難しい領域の一つである」
- 2) 日本人の英語コミュニケーション能力の欠如を日本の英語教育のせいにする人たちもいるが、英語と日本語の発想の違いは大きく、それが言語の違いとして反映され、英語母語者の表現の発想を理解できないことが習得しづらい結果につながっていることも、言語傾向を知って初めて理解できることであり、この点は今述べていることと直接的な関係はないが指摘しておきたい。これに関連したことが「英語教育、迫りくる破綻」ひつじ書房(2013) (大津由紀雄、江利川春雄、斎藤兆史、鳥飼玖美子) に掲載されているのでご一読をお勧めしたい。

## 参考文献

- 池上嘉彦(1980) 「する」と「なる」の言語学 大修館  
 池上嘉彦(1995) 『英文法を考える』ちくま文芸文庫  
 大津由紀雄、江利川春雄、斎藤兆史、鳥飼玖美子(2013) 『英語教育、迫りくる破綻』 ひつじ書房  
 平見勇雄「言語と生物の類似点に関する一考察」吉備国際大学社会福祉学部研究紀要 19.113-121.2009  
 平見勇雄「言語と生物の類似点に関する一考察2」吉備国際大学社会福祉学部研究紀要 20.99-107.2010  
 Lakoff & Johnson (1980) *Metaphor we live by*  
 Taylor, John R. (1989b), "Possessive Genitives in English", *Linguistics* 27,663-686.  
 Taylor, John R. (1996), *Possessive in English*, Oxford University Press, Oxford.